

# ジャーナリズム公開講座

会場は新静岡駅前ペガサート6階、静岡市産学交流センター（B-nest）

時間は18:30～20:30

入場無料、申込み順先着80名 どなたでも参加いただけます。

健全なジャーナリズムこそ民主主義の基本です。

	<p>第11回／安田峰俊（中国ルポライター）2020年1月30日（木）</p> <p>「香港と中国 大規模デモの根底にあるもの」</p> <p>1982年滋賀県生まれ。立命館大学文学部（東洋史学専攻）在学中に中国広東省の深圳大学へ交換留学、広島大学大学院文学研究科修士課程修了。在学中は中国近現代史を研究。多摩大学経営情報学部講師（2011年～2017年）を経て、2018年から立命館大学人文科学研究所客員協力研究員も務める。著書に『八九六四「天安門事件」は再び起きるか』（第5回城山三郎賞・第50回大宅壮一ノンフィクション賞受賞）、『さいはての中国』、『移民 棄民 遺民 国と国の境界線に立つ人々』など。</p>
	<p>第12回／河内敏康（毎日新聞東京本社医療福祉部副部長）2月28日（金）</p> <p>「医療ジャーナリズムの役割」</p> <p>1970年愛知県生まれ。筑波大学卒、東京大学大学院理学系研究科天文学専攻修士課程修了、修士（理学）。97年毎日新聞社入社。千葉支局などを経て02年から東京本社科学環境部記者。地震・防災、環境、ノーベル賞、原発などを取材した後、主に医学・医療分野を担当。ノバルティスファーマの降圧剤バルサルタン（商品名ディオバン）の臨床試験をめぐる一連の報道で、同僚の八田浩輔記者と共に13年の日本医学ジャーナリスト協会賞大賞を受賞。18年から現職。著書に『偽りの薬』（共著、14年刊、18年新潮文庫）。</p>
	<p>第13回／林 智裕（フリーランスライター）3月28日（土）14～16時</p> <p>「東電原発事故報道を巡るジャーナリズムの『正義』とエラー」</p> <p>1979年福島県生まれ。東日本大震災後は福島県在住のフリーランスライターとして、東電原発事故後の福島県の状況やその報道のあり方について『現代ビジネス』『SYNODOS（シノドス）』『ダイヤモンドオンライン』『Wedge』などに検証記事を寄稿している。その他、世界的な銘酒処として注目され始めている福島県の酒肴を毎月紹介・頒布する『fukunomo（ふくのも）』、地域の魅力やグルメ情報を発信する『福島 TRIP』などのメディアに連載中。『福島第一原発廃炉図鑑』（開沼博・編）にはデマを検証するコラムを寄稿した。</p>

第1回／中川淳一郎（ネットニュース編集者）4月25日「ネット炎上のしくみと報道への影響」
第2回／荒木 肇（教育史研究者）5月30日「歴史教育とマスメディア」
第3回／常岡浩介・安田純平（ジャーナリスト）6月27日「シリア報道とジャーナリストの責任」
第4回／今井一（ジャーナリスト）7月18日「沖縄県民投票 その意義と私たちが向き合うべき課題」
第5回／澤田克己（毎日新聞外信部長）8月1日「なぜ日韓関係は、こじれているのか」
第6回／江川紹子（ジャーナリスト）8月29日「オウム事件と死刑」
第7回／相澤冬樹（大阪日日新聞論説委員・元NHK記者）9月27日 「森友問題報道にみるNHKと安倍官邸の関係」
第8回／小川和久（静岡県立大学特任教授）10月31日「普天間基地問題はなぜ迷走したのか」
第9回／小菅信子（山梨学院大学教授）11月28日「戦争の記憶をどう伝えるか」
第10回／楊井人文（FIJ事務局長、弁護士）12月19日「今年の誤報」

静岡県立大学ジャーナリズム公開講座 受講申込書			
氏 名	フリガナ		
住 所	〒		
電話番号		職 業	
E-mail / FAX		年 齢	歳

お申込先はFAX:054-245-5603または [nishi@u-shizuoka-ken.ac.jp](mailto:nishi@u-shizuoka-ken.ac.jp)

電話:054-245-5600 前日までにお申込みできない場合、当日に受付で申込書にご記入ください。